処方番号：151　　**処方名**：天王補心丸（てんのうほしんがん）

処方構成：
酸棗仁 30、地黄 60、柏子仁 30、麦門冬 30、天門冬 30、五味子 30、当帰 18、遠志 15、茯苓 15、丹参 15、玄参 15、党参 15、桔梗 15

用法・用量：
散：1 日 6g　1 日 3 回

しばり：
体力虚弱なものの次の諸症

効能・効果：
不眠、不安感、肩こり、息切れ、動悸、口渇

原典：世医得效方
出典：

解説：
慢性消耗性疾患などで栄養不良・脱水と代謝異常がおこり、神経の抑制に異常をきたして、興奮状態となった者に使用する。体力が無いために興奮している時は、体力をつけることを第 1 にしなくてはならない。体力が無く、神経を抑制する力が無い時には、口渇・ときに口内炎・手掌や足蹠のほてり・体の熱感・寝汗・腰や膝の脱力感が現れる。それを目標に、神経の抑制が働か無くなった時に出る、寝つきが悪い・眠りが浅い・多夢・動悸・健忘・いらいらの症状に使う。
（『中医処方解説』（神戸中医研究会編）を参考とした）
処方構成については『実用漢方処方集』では生地黄として規定されているが、流通がないため地黄として換算した。

151.天王補心丸

参考文献名		生地黄	人参	茯苓	遠志	石菖蒲	玄参	柏子仁	桔梗	天門冬	丹参	酸棗仁	甘草	麦門冬	百部	杜仲	茯神
金匱要略入門	注1	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー
実用漢方処方集	注2	60		15	15		15	30	15	30	15	30		30			

参考文献名		当帰	五味子	党参	用法・用量
金匱要略入門	注1	ー	ー	ー	*1
実用漢方処方集	注2	18	30	15	*2

*1 研して細末となし、煉蜜をもって丸に和し、毎両を十丸に作り金箔を以て衣となし、毎服1丸を食後或いは臨臥に服せ。

*2 その割合を丸としてとり、1日6g(1回2g、1日3回)を用いる。日局地黄を用いる場合の割合は15(粉末を蜜丸とし朱砂をまぶす。1日6gずつ服用)

注1
天王補心丹:世医得效方
寧心、保神、益血、固精、壮力、強志、清三焦、化痰涎、祛煩熱、除驚悸、思慮過度、心血不足、神志不寧、津液枯涸、咽乾口燥、健忘怔忡、大便不利、口舌生瘡等の証を治す。

注2
目標:滋陰清熱、養心安神
応用:不眠症、自律神経失調症、神経衰弱、発作性頻脈、心臓神経症、健忘症、口内炎、甲状腺機能亢進症、高血圧症などで心腎陰虚を呈するもの

処方番号：152　　**処方名**：桃核承気湯（とうかくじょうきとう）

処方構成：
桃仁 5、桂枝 4、大黄 1-3、芒硝 1-2、甘草 1.5

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度あるいはそれ以上で、のぼせて便秘しがちなものの次の諸症

効能・効果：
月経不順、月経困難症、月経痛、月経時や産後の精神不安、腰痛、便秘、高血圧の随伴症状（頭痛、めまい、肩こり）、痔疾、打撲傷

原典：傷寒論
出典：

解説：
主薬が桃仁であるため、桃仁承気湯と称すべきであると吉益南涯はいっている。
本方は調胃承気湯に似て、いわゆる血証をおびるものに用いる駆瘀血剤である。同じ駆瘀血剤の桂枝茯苓丸証とりも急迫状の徴候が見られ、便秘の傾向がある。
大黄・芒硝を含むので小児に用いるときは注意が必要である。

152.桃核承気湯

参考文献名		桃仁	桂枝	大黄	芒硝	甘草	用法・用量
処方分量集		5	4	3	2	1.5	
診療の実際	注1	5	4	3	2	1.5	
診療医典	注2	5	4	3	2	1.5	
症候別治療	注3	5	4	3	2	1.5	
処方解説	注4	5	4	3	2	1.5	*
後世要方解説		−	−	−	−	−	
漢方百話	注5	−	−	−	−	−	
応用の実際	注6	5	4	3	2	1.5	
明解処方	注7	5	4	3	2	1.5	

＊ 水600ccをもって芒硝以外の諸薬を煮て300ccとし、滓を去って芒硝を加え、再び火にかけて溶かし、3回に分かち温服する。

注1 月経時に精神異常を呈し興奮するもの，月経困難，産後発狂状となるもの，月経不順より来る諸患。

注2 月経困難症，月経不順より来る諸種の疾患，月経時に精神異常を呈するもの，産後発狂状となるものなど。

注3 月経異常，月経困難，腹痛，頭痛，瘀血による腹痛，瘀血が原因の精神異常，便秘，肩こりなど。

注4 実熱の瘀血症で上衝のあるもの。頭痛，めまい，耳鳴，肩こり，のぼせ，腰痛，便秘，煩熱・足冷え等の自律神経症状。興奮，不眠，健忘，狂状，譫妄等の精神症状，月経不順，月経困難，ノイローゼ，ヒステリー，神経衰弱，脳出血，動脈硬化症，高血圧症。

注5 小腹急結の証があって，便秘上逆のある場合に用いる。桂苓丸より，上衝足冷え顕著，急性動的で発揚性。

注6 中等度以上に体力が充実し，体質のしっかりした人が瘀血により症状を呈し，便秘上衝のあるもの。月経不順，月経困難症(腰，腹痛の激しいもの)。月経時や産後の精神病，ヒステリー。

注7 下腹部に凝結を触知し圧痛感あり，便秘，腹壁は緊張，のぼせ症と下冷症あり。

参考：類聚方広義に「血行利せず，上衝心悸，少腹抱急，四肢窘痺，或は痼冷のものを治す。淋家少腹抱急，痛み腰腿に連り，茎中疼痛，小便涓滴通ぜざるもの，利水剤の能く治する処に非ず。この方を用いれば則ち二便快利，苦痛立ち処に除く」とある。

方輿輗に「痢疾腹痛はなはだしく，裡急後重常ならずして，紫黒色のものを下すは瘀血なり，此症桃仁承気湯に非ざれば功を立つること能わず，其質実を認めて，初中末を問はず，下り物の紫黒或は魚脳髄の如きを下すを此れ瘀血の所為なりと知って此湯を用ゆべし」とある。

処方番号：153　　**処方名**：当帰散（とうきさん）

処方構成：
当帰3、芍薬3、川芎3、黄芩3、白朮1.5（蒼朮も可）

用法・用量：
（１）散：1回1-2g　1日3回
（２）湯

しばり：
体力中等度以下から虚弱なものの次の諸症

効能・効果：
産前産後の障害（貧血、疲労倦怠、めまい、むくみ）

原典：金匱要略
出典：

解説：
当帰散については原典に「当帰、芍薬、川芎、黄芩、白朮の五味を搗いて細末となし、酒でひと匙ずつ１日２回服用させる。妊娠中常用させると分娩が容易に、胎児に支障なく、産後のすべての病は、悉く当帰散これを主る」とある。すなわち元来は散剤であって、しかも酒を用いて服用すべきものである。

153.当帰散

参考文献名		当帰	芍薬	川芎	黄芩	朮	白朮	用法・用量
診療医典	注1	3	3	3	3	1.5	−	
治療の実際	注2	3	3	3	3	1.5	−	
漢方処方集		2	2	2	2	−	1	*1
処方分量集		3	3	3	3	1.5		*2

*1 上の割合で散剤として日本酒で1回2を服す。1日2回服用
*2 当帰散料

注1 妊娠中，常に服用すれば胎児の発育がよく，出産が軽く，諸病を防ぐことができる。流産癖のものに服用させて正常分娩を得ることができた。

注2 妊娠中，産後の養生，不妊症

処方番号：154　　**処方名**：当帰四逆湯（とうきしぎゃくとう）

処方構成：
当帰 3-4、桂枝 3-4、芍薬 3-4、木通 2-3、大棗 3-6.5、細辛 2-3、甘草 2-2.5

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度以下から虚弱で、手足が冷えて下腹部が痛くなりやすいものの次の諸症

効能・効果：
しもやけ、下腹部痛、腰痛、下痢、月経痛、冷え症

原典：傷寒論
出典：

解説：
桂枝湯から生姜を去り、大棗、当帰、細辛、木通を加えた処方である。また、当帰建中湯の加減方と考えられる。表の虚寒により血の循行を妨げられた状態（凍傷、疝痛など）に用いる。

154.当帰四逆湯

参考文献名		当帰	桂枝	芍薬	木通	通草	大棗	細辛	甘草	炙甘草	用法・用量
処方分量集		3	3	3	3	−	5	2	2	−	
診療の実際	注1	3	3	3	3	−	5	2	2	−	
診療医典	注2	3	3	3	3	−	5	2	2	−	
症候別治療		3	3	3	3	−	5	2	2	−	
処方解説	注3	3	3	3	3	−	5	2	2	−	
後世要方解説		−	−	−	−	−	−	−	−	−	
漢方百話		3	3	3	3	−	5	2	2	−	
応用の実際	注4	3	3	3	3	−	5	2	2	−	
明解処方	注5	4	4	4	2.5	−	4	3	2.5	−	
漢方処方集		3	3	3	2	−	6.5	3	2	−	
新選類聚話		3	3	3	2	−	6.25	3	−	2	
漢方入門講座		3	3	3	2	−	6	3	2	−	
漢方医学		3	3	3	3	−	5	2	2	−	
基礎と診療	注6	3	3	3	2	−	6.5	3	2	−	
古方要方解説	注7	1.8	1.8	1.8	−	1.2	1.8	1.8	1.2	−	*
成人病の漢方療法		−	−	−	−	−	−	−	−	−	

＊ 1回分量 通常1日2-3回服用

注1 手足が冷えて脈が細少であるものを目標として用いる。また手足が冷えると腹にガスがたまって痛むもの，すなわち古人のいわゆる疝気腹のものに用いる。本方は凍傷，坐骨神経痛，腸の疝痛，慢性腹膜炎，子宮脱，子宮およびその附属器からくる腹痛等によい。

注2 本方は当帰建中湯の加減方とみるべきもので「手足厥寒，脈細にして絶せんとする」ものを目標とする。本方は古人が疝気腹とよんだものに用い，腹部は一体に虚満の状を呈し，腹直筋は緊張して，腹診によって，腹表に抵抗を証明するが，力を入れて按圧すると底力がなく，腹にガスがたまりやすい。

注3 手足が冷えると腹にガスがたまり，腹が張って痛むというもの。

注4 手足が冷えて，腹が張って痛んだり，あるいは腹鳴して下痢したり，あるいは頭痛，あるいは帯下，あるいは月経不順などがあるもの。

注5 南涯「四肢に血滞って気逆するものを治す。その症に曰く，厥寒これ血滞って気逆するの症なり」

注6 手足の冷える人，手足が冷えると腹が張って痛む人（疝気腹）腹が冷えて下痢する人，冷え性で下腹から腰にかけて痛む人，小便の1回量の少ない人によい。

注7 故に医聖方格にいわく「脱血家（液分脱失させるものを汎称す），心下ニ停飲有リテ頭痛シ，或ハ身痛ム者ハ，当帰四逆湯之ヲ主ドル」と。この説，能く本方の効用を約言せりというべし。

処方番号：154A　　**処方名**：当帰四逆加呉茱萸生姜湯
（とうきしぎゃくかごしゅゆしょうきょうとう）

処方構成：
当帰 3、桂枝 3、芍薬 3、木通 3、細辛 2、甘草 2、大棗 5、呉茱萸 1-2、
生姜 1（ヒネショウガを使用する場合 4）

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度以下から虚弱で、手足の冷えを感じ、下肢が冷えが強く、下肢又は下腹部が痛くなりやすいものの次の諸症

効能・効果：
冷え症、しもやけ、頭痛、下腹部痛、腰痛、下痢、月経痛

原典：傷寒論
出典：

解説：
本方は当帰四逆湯に呉茱萸と生姜を加えたものである。呉茱萸は血行をよくして手足の冷えを温め、生姜も温剤で胃を開き嘔吐を止める作用があるものとされている。
一般に冷え症のもので慢性の疼痛性の疾病があり、その疼痛は寒冷刺激によって表位に血行障害を起こし、凍傷をはじめ下腹部の痛み、腰の痛み、背痛、頭痛、四肢の痛みなどがあらわれる。とくに嘔吐、下痢などの水症の伴うものに本方を用いるとよいとされている。男性よりも中年の女性に多くあらわれる症状で、病人が困っているにも拘らず医者からは神経のせいだなどと、軽くあしらわれるような場合に用いてよい。

154A.当帰四逆加呉茱萸生姜湯

参考文献名		当帰	桂枝	芍薬	木通	細辛	甘草	大棗	呉茱萸	生姜	乾生姜	用法・用量
診療医典	注1	3	3	3	3	2	2	5	2	4	−	
治療の実際	注2	3	3	3	3	2	2	5	2	4	−	
処方解説	注3	3	3	3	3	2	2	5	1〜2	−	1	*
応用の実際		3	3	3	3	2	2	5	2	4	−	
基礎と診療	注4	3	3	3	2	3	2	6.5	6	8	−	
処方分量集		3	3	3	3	2	2	5	2	4	−	
漢方処方集	注5	3	3	3	2	3	2	6.5	6	8	−	
漢方処方		4	4	4	1.5	3	1.5	4	2	4	−	
漢方診療のレッスン		3	3	3	3	2	2	5	2		0.5	

＊ 傷寒論には水に酒を等量加えたもので煎出するものとある。普通、本剤は水400ccに清酒200ccを加えたもので煮沸して全量300ccまで煮つめ、滓を去って5回に分服する。

注1 手足の冷え，凍傷，腸の疝痛，坐骨神経痛，慢性腹膜炎，腹部の手術後の癒着痛，腰から下肢に波及する疼痛，陰萎。

注2 常習頭痛，神経症やヒステリーからくる下腹痛，腰痛，足痛，冷えに原因する歯痛，疝気による腹痛，しもやけ，凍傷状狼瘡，下半身に寒があり上半身に熱のある腹痛，腰痛，下肢の痛み，のぼせ，冷寒症，月経困難症。

注3 脱疽，レイノー病，皮膚病，水虫，瘰疬などでチアノーゼを呈するもの，諸神経痛，ヘルニアの痛み。

注4 凍傷の治療，秋から連用すると予防に特効がある。婦人病，胃酸過多症。

処方番号：155　　**処方名**：当帰芍薬散（とうきしゃくやくさん）

処方構成：
当帰 3、川芎 3、芍薬 4-6、茯苓 4、白朮 4（蒼朮も可）、沢瀉 4-5

用法・用量：
（1）散：1 回 1-2g　1 日 3 回
（2）湯

しばり：
体力中等度以下から虚弱で、冷え症で貧血の傾向があり疲労しやすく、ときに下腹部痛、頭重、めまい、肩こり、耳鳴り、動悸などを訴えるものの次の諸症

効能・効果：
月経不順、月経異常、月経痛、更年期障害、産前産後あるいは流産による障害（貧血、疲労倦怠、めまい、むくみ）、めまい・立ちくらみ、頭重、肩こり、腰痛、足腰の冷え症、しもやけ、むくみ、しみ、耳鳴り、低血圧

原典：金匱要略
出典：

解説：
本方は陰証の駆瘀血剤である。瘀血症状に対して用いられる薬方は、大黄牡丹皮湯、桃核承気湯、桂枝茯苓丸、などとあるが本方は、虚証の血水証に用いられるものである。血証（循環障害）は下腹部に水証（水分代謝障害）は心下部に現われる。したがって用法は筋肉がいったいに軟弱で、疲労しやすく、貧血（瞼の裏の白いもの）の傾向があり腰や足が冷えやすく、頭痛、頭冒を訴え、めまい、肩こり、耳鳴り、動悸、心悸亢進、不眠、などのあるもの、また婦人病や妊娠中の腹痛を目標に用いる。なお胃腸の弱い人で、本方により胃腸にさしさわりの起こる者には人参湯や柴胡剤等を合方することがよい。
『方函類聚』に「婦人の腹痛　痛を治す。但し和血に利水を兼たる故、建中湯の水気を兼る者又逍遙散の痛を兼る者に宜し、又胎動腹痛によし痛甚しくして大腹にあるなり、膠芥湯は小腹にあって腰にかかる早々治せざれば将堕胎の兆となるなり」とある。

155.当帰芍薬散

参考文献名		当帰	川芎	芍薬	茯苓	白朮	朮	沢瀉	用法・用量
処方分量集		3	3	4	4	−	4	4	
診療の実際		3	3	4	4	−	4	4	
診療医典	注1	3	3	4	4	−	4	4	
症候別治療		3	3	6	4	−	4	5	
処方解説	注2	3	3	6	4	−	4	4	*1
応用の実際		3	3	4	4	−	4	4	*2
明解処方		3	3	5	5	−	5	6	
実用漢方処方		3	3	4	4	4	−	4	
診かた治しかた		3	3	4	4	−	4	4	
金匱要略入門		3.9	3	16	4	4	−	12	
漢方診療のレッスン		3	3	4	4	−	4	4	

*1 六味を混ぜて末とし、毎服2gずつ、1日3回酒に混和して服用する。微温湯をもって服用すると胸に痞えて嘔気を催すことがある。一般には湯剤として用いる。
*2 散薬として用いるには、以上の割合で粉末とし、よく混合し1回量1−2gを1日3回服用する。

注1 老若男女を問わず，冷え症で貧血の傾向があり，筋肉は一体に軟弱で女性的であり，疲労しやすく，腹痛は下腹部に起り，腰部あるいは以下に波及することがあるが，腹痛がなくても，本方を用いてよい。また頭冒，頭重，めまい，肩こり，耳鳴，動悸などを訴えることもある。本方では場合によって，食欲を害する人があるので，食欲不振，悪心，嘔吐のある人にはよくないことがある。

注2 虚証の瘀血(血虚)と水毒による症状で，体質は陰虚証である。主訴は貧血と腹痛である。全体的にみて，貧血性で筋肉の緊張は弱く，痩せ型，色白で，脈も沈んで弱く，腹壁は一般に軟かく，心下部に拍水音を証明することが多く，下腹部の抵抗や圧痛は一定しない。腹証奇覧では臍傍に拘攣するものがあって，これを圧迫すると，腰や背にひびくのをもって本方の腹証としている。腹痛は下腹の深部に起り，温い手で按ずると軽快する。小便は近く多量で，ときには浮腫がある。訴えは全身倦怠の足冷感，頭重，眩暈，耳鳴，肩こり，腰痛，心悸亢進等である。

処方番号：155A　　**処方名**：当帰芍薬散加附子（とうきしゃくやくさんかぶし）

処方構成：
当帰 3、沢瀉 4-5、川芎 3、加工ブシ 0.4-1、芍薬 4-6、茯苓 4、白朮 4（蒼朮も可）

用法・用量：
湯

しばり：
体力虚弱で、冷えが強く、貧血の傾向があり疲労しやすく、ときに下腹部痛、頭重、めまい、肩こり、耳鳴り、動悸などがあるものの次の諸症

効能・効果：
月経不順、月経異常、月経痛、更年期障害、産前産後あるいは流産による障害（貧血、疲労倦怠、めまい、むくみ）、めまい・立ちくらみ、頭重、肩こり、腰痛、足腰の冷え症、しもやけ、むくみ、しみ、耳鳴り、低血圧

原典：類聚方広義
出典：

解説：
原典である『類聚方広義』は、吉益東洞が傷寒論と金匱要略の条文を処方ごとに再編集し、薬方の使い方のエッセンス（自著『方極』）を加えた『類聚方』に、尾台榕堂が頭注をつけた本である。その『類聚方広義』の当帰芍薬散の項に、尾台榕堂が「……下痢止まらず、悪寒するものは附子を加える」と書いている。附子は吉益東洞の『薬徴』に「……悪寒・身体四肢及び骨節疼痛、或いは沈重、或いは不仁、或いは厥冷を治す。……」とある。長沢道寿（？～1637）の『増補能毒』の附子の項に、附子の適用の症状があるときには、適用薬方に附子を加えるという方法が書かれて、主方に附子を加えることは古くから行われていたと思われる。
当帰芍薬散の証で、冷えが強い時、また冷えにより関節や下腹部などが痛む時に応用される。

155A.当帰芍薬散加附子

参考文献名	当帰	川芎	芍薬	茯苓	白朮	蒼朮	朮	沢瀉	附子	用法・用量
現代漢方入門　注1	–	–	–	–	–	–	–	–	0.4*	
(当帰芍薬散の成分表)										
処方分量集	3	3	4	4	–		4	4		
診療の実際	3	3	4	4	–		4	4		
診療医典	3	3	4	4	–		4	4		
症候別治療	3	3	6	4	–		4	5		
処方解説	3	3	6	4	–		4	4		*1
応用の実際	3	3	4	4	–		4	4		*2
明解処方	3	3	5	5	–		5	6		
実用漢方処方	3	3	4	4	4		–	4		
診かた治しかた	3	3	4	4	–		4	4		
金匱要略入門	3.9	3	16	4	4		–	12		
漢方診療のレッスン	3	3	4	4			4	4		

*1　六味を混ぜて末とし、毎服2gずつ、1日3回酒に混和して服用する。微温湯をもって服用すると胸に痞えて嘔気を催すことがある。一般には湯剤として用いる。
*2　散薬として用いるには、以上の割合で粉末とし、よく混合し1回量1-2gを1日3回服用する

注1
・つわり症状
・顔が青白く、脈は細くて沈んでいる。腹診すると腹壁は弛緩して力がない。
・もともと冷え症である。
・冷えと疲労感の軽減。
・流産防止

中医処方解説には、以下の記載があるが、分量が不明なため、配合表に入れなかった。
・当帰芍薬散証で冷え、寒気が強い場合に用いる。

(自律神経失調症、更年期症候群、胃腸神経症、栄養不良性浮腫、内分泌失調性浮腫、慢性腎炎、貧血症、月経不順、月経困難症、習慣性流産、妊娠浮腫、妊娠腎、帯下、冷え症などで、血虚・脾虚湿盛を呈するもの)

処方番号：155B　　**処方名**：当帰芍薬散加人参（とうきしゃくやくさんかにんじん）

処方構成：
当帰 3、沢瀉 4-5、川芎 3、芍薬 4-6、茯苓 4、白朮 4（蒼朮も可）、人参 1-3

用法・用量：
湯

しばり：
体力虚弱で胃腸が弱く、冷え症で貧血の傾向があり、疲労しやすく、ときに、下腹部痛、頭重、めまい、肩こり、耳鳴り、動悸などを訴えるものの次の諸症

効能・効果：
月経不順、月経異常、月経痛、更年期障害、産前産後あるいは流産による障害（貧血、疲労倦怠、めまい、むくみ）、めまい・立ちくらみ、頭重、肩こり、腰痛、足腰の冷え症、しもやけ、むくみ、しみ

原典：
出典：山田光胤・漢方処方集

解説：
当帰芍薬散で胃腸を害する人がいる。それを防ぐ方法の一つとして本方がある。人参を加えることにより、四君子湯（人参・白朮・茯苓・甘草・生姜・大棗）の方意が加わったと考えられる。

155B.当帰芍薬散加人参

参考文献名	当帰	川芎	芍薬	茯苓	白朮	蒼朮	朮	沢瀉	人参	用法・用量
細野方									1～3	
(当帰芍薬散の成分表)										
処方分量集	3	3	4	4	−		4	4		
診療の実際	3	3	4	4	−		4	4		
診療医典	3	3	4	4	−		4	4		
症候別治療	3	3	6	4	−		4	5		
処方解説	3	3	6	4	−		4	4		*1
応用の実際	3	3	4	4	−		4	4		*2
明解処方	3	3	5	5	−		5	6		
実用漢方処方	3	3	4	4	4		−	4		
診かた治しかた	3	3	4	4	−		4	4		
金匱要略入門	3.9	3	16	4	4		−	12		
漢方診療のレッスン	3	3	4	4			4	4		

*1　六味を混ぜて末とし、毎服2gずつ、1日3回酒に混和して服用する。微温湯をもって服用すると胸に痞えて嘔気を催すことがある。一般には湯剤として用いる。
*2　散薬として用いるには、以上の割合で粉末とし、よく混合し1回量1−2gを1日3回服用する

処方番号：155C　　**処方名**：当帰芍薬散加黄耆釣藤（とうきしゃくやくさんかおうぎちょうとう）

処方構成：
当帰 3、沢瀉 4-5、川芎 3、芍薬 4-6、茯苓 4、白朮 4（蒼朮も可）、黄耆 3、釣藤鈎 4

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度以下から虚弱で血圧が高く、冷え症で貧血の傾向があり、疲労しやすく、ときに、下腹部痛、頭重、めまい、肩こり、耳鳴り、動悸などを訴えるものの次の諸症

効能・効果：
高血圧にともなう随伴症状（のぼせ、肩こり、耳なり、頭重）

原典：
出典：大塚恭男

解説：
四物湯（当帰・川芎・芍薬・地黄）に黄耆・釣藤鈎・黄柏が加わった処方が七物降下湯である。本方は七物降下湯と同じように最低血圧が高く、朝頭痛するのを目標として使われていて、七物降下湯と比較すると冷えが強く、胃腸の弱い人に使われる。

155C.当帰芍薬散加黄耆釣藤

参考文献名	当帰	川芎	芍薬	茯苓	白朮	蒼朮	朮	沢瀉	黄耆	釣藤	用法・用量
北里処方分量集									3	4	
漢方診療のレッスン	3	3	4	4		4		4	○	○	
(当帰芍薬散の成分表)											
処方分量集	3	3	4	4	−		4	4			
診療の実際	3	3	4	4	−		4	4			
診療医典	3	3	4	4	−		4	4			
症候別治療	3	3	6	4	−		4	5			
処方解説	3	3	6	4	−		4	4			*1
応用の実際	3	3	4	4	−		4	4			*2
明解処方	3	3	5	5	−		5	6			
実用漢方処方	3	3	4	4	4		−	4			
診かた治しかた	3	3	4	4	−		4	4			
金匱要略入門	3.9	3	16	4	4		−	12			

*1 六味を混ぜて末とし、毎服2gずつ、1日3回酒に混和して服用する。微温湯をもって服用すると胸に痞えて嘔気を催すことがある。一般には湯剤として用いる。
*2 散薬として用いるには、以上の割合で粉末とし、よく混合し1回量1-2gを1日3回服用する

処方番号：156　　**処方名**：当帰湯（とうきとう）

処方構成：
当帰 4-5、半夏 4-5、芍薬 3-4、厚朴 2.5-3、桂枝 2.5-3、人参 2.5-3、乾姜 1.5、黄耆 1.5、山椒 1.5、甘草 1

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度以下から虚弱で、背中に冷感があり、腹部膨満感や腹痛のあるものの次の諸症

効能・効果：
胸痛、腹痛、胃炎

原典：千金方
出典：

解説：
この方は狭心症ではなく、仮性狭心症ともいうべき胸背痛に用いられる。『千金方』の主治には「心腹、絞痛、諸虚、冷気、満痛を治す」とある。
浅田宗伯は「この方は腹中に筋肉のひきつれがあって痛み、それが肩背へ抜けて強く痛むものによい」と述べている。肋間神経痛によく用いられる。

156.当帰湯

参考文献名		当帰	半夏	芍薬	厚朴	桂枝	桂皮	人参	乾姜	黄耆	山椒	蜀椒	甘草	用法・用量
診療医典	注1	5	5	3	3	3		3	1.5	1.5	1.5		1	
治療の実際	注2	5	5	3	3	3		3	1.5	1.5	−	1.5	1	
処方分量集		5	5	3	3	3		3	1.5	1.5	1.5		1	
漢方の基礎と応用		5	5	3	3	−	3	3	1.5	1.5	1.5		1	
漢方診療三十年		5	5	3	3	3		3	1.5	1.5		1.5	1	

注1　冷え症で血色もわるく，腹壁の緊張が弱く，脈も遅弱の患者で，痛みがみぞおちから胸に放散し，それが背まで透るようなものによい。肋間神経痛とか，狭心症というような病名がつけられている患者に，本方を用いて治るものがある。胃潰瘍症，十二指腸潰瘍症。

注2　仮性狭心症ともいうべき胸背痛に用いる。血色のすぐれない冷え症のもので腹部にガスが充満し，ことに上腹部にはなはだしく，そのため胸部が圧迫される傾向のものによく効く。

肋間神経痛あるいは狭心症といわれ，病名もはっきりせず，胸背の痛みが慢性化したものに，この方を用いて著効を得ることがある。